

Computer Report

Vol. 52 No. 8 8月号 (通巻 695号)

はじめの言葉

■トヨタ自動車とフォード社と合併でアメリカに進出する、というニュースが大々的に報道された。経済大国ニッポンを象徴するような話題である。アメリカの自動車産業は不況で、大勢の失業者を出しているのに、日本の自動車産業は、わが世の春を謳歌(?)している。いってみれば、日本の自動車産業がアメリカのそれを打ち破りつつある、ということである。競争に敗れたアメリカの企業が、日本の企業を悪者扱いにしているのが、最近のアメリカ事情である。アメリカが信奉する「自由競争」の一断面に過ぎない。

■自動車に限らない。弱電機器、時計、カメラ、オートバイ、あるいは鉄鋼など、いまや世界を制覇する勢いである。それに比例して、アメリカはじめ EC 諸国も、エコノミックアニマルー日本への風当たりはエスカレートする。理屈ではない。自国の産業が次第に衰退していく姿を見るのは面白くない。人情というものだろう。それを「時の流れ」として諦める感覚を持ち合わせない欧米人にとっては、苦痛であろう。日本の厳しい諦観は、これを「引かれ者の小唄」と呼ぶ。

■しかし、である。考えてみると、日本とて他人事ではないように思えてならない。かつての繊維王国の姿は、日本のどこにもない。石炭が石油にとって代わられた歴史は、過去の歴史の一端に過ぎないだろうか。一つの歴史上の話として片付けるには、あまりにも多くの問題を、われわれに与えている。日本の経済は本当に強いのだろうか。本当の自力を持っているのだろうか。誠に心許ないと言わざるを得ない。

■自動車産業が今日に到るまでに半世紀を費やしている。今後半世紀への何の保証もないのである。もともと、日本の産業というのは、すべて外国産業の物真似から出発している。自動車はもちろん、鉄鋼でも、時計でもカメラでも……。でき上がっているものを上手に真似て、それを、よりよく、より安く作ることにかけては、世界に類はないほど強い。

■しかし経済大国ニッポンは、21世紀に向けて、「何を」「どうするのか」。何も無い。エレクトロニクスだ、知識産業だ、と答える人はいる。だが、本当にそう思っている人は何人いるだろうか。それにかかわる人々、その環境が、あまりにもお粗末であることを知っているからである。さあどうする。また 20~30 年辛抱するか。(以上 1980 年 8 月号)

■冒頭に断るべきだったかもしれないが、今から 32 年前の弊誌 8 月号の「はじめの言葉」を引用させていただいた。まさに「ジャパンアズ No.1」を謳歌しようとしている時の歴史の 1 ページである。こういう歴史を経て今日があるニッポンだが、このほど国策コンピュータ会社の筆頭富士通が、同社の半導体工場を台湾企業への売却を決めた。まさに 21 世紀の日本産業のあり様を象徴しているかの事件である。

■一方、株価低迷の NEC は、自力再建の道は断たれたという関係者もあるほど疲弊している。先にアメリカ資本の傘下に入ったエルピーダ、富士通の半導体工場に続き、日本電気が中国電気、アメリカ電気になる日も間近いと予測するむきもある。たった 32 年の年月の間の驚くべき移り替わりを思わざるを得ない。そう言えば、世界最長寿国の座も香港に譲り渡したらしい。日本再生プロジェクトの始動は、まさに待ったなしである。(藤見)